
日本科学者会議 京都支部ニュース

9月号 No.343

2012年9月11日発行

〒604-0931 京都市中京区二条通寺町東入榎木町 95-3 南館 3 階

Tel/Fax : 075-256-3132

E-mail : kyoto_kagakusha_2@yahoogroups.jp

URL : <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/jsa-k/>

ゆうちょ銀行振替口座 加入者名：日本科学者会議京都支部 口座番号：01050-6-18166

目 次

- JSA 京都支部学生研究会 (8/9) の報告2
 - ヒューマン・エシックス研究会 (8/18) の報告2
 - 『日本の科学者』読書会 8 月例会報告 (8/24)3
 - 第 33 回原子力発電問題全国シンポジウムの報告 (8/25,26)5
 - 「無償教育の漸進的導入」に関する日韓 (韓日) 連帯シンポジウム (8/31) の報告6
 - 第 9 回『日本の科学者』近畿地区サポーター会議 (9/2) の報告7
 - 関西技術者研究者懇談会 9 月例会の報告 (9/9) の報告8
 - 講演会・研究例会などの案内9
 - ・「日本の科学者」読書会 9 月例会 (9/21) 「新しい社会運動の胎動」特集
 - ・個人懇フィールドワーク (9/25)
 - ・個人懇秋の勉強会 (10/25)
 - 会員からの通信：「第三回小中一貫校問題を考える全国交流集会 (案) ——東山の学校統廃合を考える会」案内9
 - 寄稿：原発事故と科学者の社会的責任について10
 - オピニオン (または愚痴)：「京都の科学者」の編集を 1 人で 3 年間担当して13
 - ◆ 支部幹事会だより15
 - ◆ JSA 近畿地区の催し物案内・「JSA 近畿 No.47.30」16
-

2012 年度会費，まだの方は，同封の振込用紙でお振込み願います。
2011 年度会費滞納の方の全国会費は，会員権保持のため，
毎月支部経費で立替えて上納しています。早急に納入してください。

JSA 京都支部学生研究会の報告

上野恭平

8月9日に学生研究会の定期会合が行われました。東山市民いきいき活動センターにて開催された定期会合では、会の代表世話人である上野恭平（立命館大学哲学専攻）が「民主主義とは何か ―我々の生活の中の民主主義―」という論題において、現代における民主主義の必要性和その概念の内容についての報告を行いました。

会合において民主主義概念の前提である平等と権利と義務、またミシェル・ボーの『大反転する世界』（藤原書店 2002 年刊）を参照しながら、民主主義概念の対立概念としての資本主義についての報告が行われました。後の議論において民主主義における平等は前提でなく「理念」であり、前提とはならない。また民主主義と対立する概念は資本主義であるが、民主主義は資本主義と同様に現実の反映としての概念であるのではなく、常に省みられるべき理念としての性質を備えるという

ことが確認されました。

学生研究会は2011年に学生4人が主体となり準備会が発足し、本年度の京都支部大会において承認され活動を開始した学部生を中心とした研究会です。哲学、経済学、社会学など、様々な分野を学ぶ学生が月に一度集まり、報告者の報告を土台にして各々の立場から議論を行っています。会の運営については、主体は学部生ですが、JSA会員、非会員または学部生でなくてもどなたでも参加できるものとなっています。

現在の学生をとりまく状況において、学生が成績評価や領域の限定無く議論できる場はあまり多くありません。そのような中で参加者すべてが対等な立場で議論し、自由に各々の専門、また興味や関心を深めていける場として学生研究会が機能することを目指し活動しています。

ヒューマン・エシックス研究会の報告

宗川吉汪

生命と医の倫理委員会は年に2回、東京と京都でそれぞれヒューマン・エシックス研究会を開催している。今回は京都の「東山いきいき市民活動センター」を会場に8月17～18日に研究会を開催した。

17日午後、「人体の不思議展が問いかけた生命倫理の課題」を宗川が、「人体標本の商業展示に対する各国規制状況」を末永恵子が発表した。

宗川は、日本で人体展が15年もの永きにわたって開催された理由の一つにわれわれの人権意識の希薄さを指摘した。死者の尊厳を守ることが生者の尊厳を守ることにつながる。

末永は、ドイツ、アメリカ、フランス各国の事情について報告した。フランスでは、人体標本の商業展示が違法であるとの判決がだされたが、その背景に人体の尊重が人権のひとつであるというフランス「生命倫理法」の

規定がある。

18日午前、黒須三恵「死をめぐる医学倫理教育」、長島隆「包括同意のジレンマ」の報告があった。

黒須は勤務校の東京医科大学の教育要項を中心に検討した。学生は「死」について、いのちの大切さ、死の看取り、遺族のケアなど、講義を通して学ぶ機会が多いが、やはり実際に経験してはじめて実感することが少ない。

長島は医学研究における包括的同意の危う

さについて述べた。包括的同意とは、被験者の試料を目的を特定しなくとも被験者の同意があれば使うことができる、というものである。これはインフォームド・コンセントの精神からの逸脱で、試料が被験者の利益とは無関係に研究に使われる。

18日午後、今後の当研究会のあり方について討議した。研究テーマを「身体・死体（その一部を含む）の利用における被験者保護の論理」に設定し、成果の出版をめざすこととした。

『日本の科学者』読書会 8 月例会報告

菅原建二

標記例会が 8 月 24 日（金）午後 3 時半より支部事務所にて開催された。今回は機関紙 6 月号特集【都市の防災】が取り上げられた。参加者は 7 名であった。

室崎論文「都市防災の現状と課題 ― 次の災害に備えて」は菅原により報告された。著者は、“都市災害は中山間地災害と表裏一体の関係にある”“東日本大震災では、この都市化による災害と過疎化による災害が同時に表面に出てきてしまった”と述べているが、意味がよくわからない。説明不足と思う。本論文は、タイトルに《都市防災》とあるが、都市や過疎地に拘わらず、防災について総論的に論じている。本論は、現在の防災体制の批判であり、実効性、体系性、科学性、戦略性、協働性の五つの欠落があるとしている。例えば、科学性の欠落については、被害想定、リスクマネジメント、減災技術開発などに科学が有効に生かされていない。あらゆる面で科学的な支援が求められているのに、科学者を含め、それに応えようとする動きが弱い。

討論では、大雨の時、被害が少ない所に河川水を意識的に氾濫させ、市街地での被災を減じたという、武田信玄の「霞堤」（かすみてい）と関連して、参加者から、京都にも浸水防止のための雨水貯留施設が地下に作られているとの発言があった。東京都の大規模な地下貯留施設をテレビで見たことがあるが、同様の施設が京都にもあるとは知らなかった。京都市によると、東大路や堀川通りの地下など数カ所にあり、最大は東大路の 64000 トンであるとのことである。

また、先日の集中豪雨による宇治市などの水害の話になり、秀吉が巨椋池（おぐらいけ）に流れ込んでいた宇治川を大規模な治水工事で巨椋池から切り離し、流れの向きを変えたことが洪水の原因ではないかとか、現在の宇治市の人はかつては池だった所に住んでいることを知らないのではなどの疑問が出された。

竹山論文「問題の多い都市住宅の耐震性」は清水民子さんが紹介した。耐震性が不十分とされる住宅は木造住宅で、全国の住宅の

87%。したがって、耐震化の中心的課題は木造戸建て住宅になる。著者によれば、この課題の目標はある程度壊れても倒壊しない程度に耐震化することであり、倒壊がなければ圧死と火災による人的被害を大幅に減らせるとのこと。

筆者はマンションや高層ビルは地震に強いと思っていた。しかし、本論文によれば、5階建て以下のマンションは比較的安全だが、それ以上の高層マンションや超高層ビルは必ずしも安全ではないとのことである。5階建て以上の建物は水平耐力が大きくなり、この耐力に耐える建築コストが高いため、限界耐力計算法という一種の手抜き手段が認められており、大きな地震に耐えられない可能性があるとのことである。

超高層マンションは更に危険とのこと。強度に疑問がある建築部材の使用や施行ミス of 頻度が高くなるなどの問題がある。地盤も問題となる場合がある。東日本大震災に関連して327の免震ビルを調査したところ90件で免震装置が破壊され稼動しなかったことが判明している。また、長周期地震動で被害がでる恐れがある。被害がないまでも、屋上に近いほど激しい横揺れに見舞われ、恐怖を味わうことになる。

以下の3論文は鈴木博之さんが紹介した。

浜田論文「地震・津波災害の軽減と安全・安心社会の構築」は東日本大震災を起こした地震・津波の予知の失敗から、「耐津波学」の構築を提唱している。津波の発生機構、津波に強い社会基盤施設や情報・伝達手段の構築、人的被害の軽減と防災教育の強化などを研究するとのこと。また、以下の2論文同様、臨海部コンビナートの地震・津波に伴う危険性とその対策、特に老朽化した護岸の改築や液

状化対策の緊急性を指摘している。

鈴木論文「コンビナートの地震被害の特徴と耐震・防災対策」は石油や高圧ガス施設に絞って、地震による被害とその原因について詳述している。地震によるタンク本体の破損は少ないが、タンクの支柱の強度や配管の接合部に問題があるとのこと。内容物の漏洩をおこし、火災発生の原因となっている。古いタンクの構造に由来するスロッシングの問題も指摘されている。対策としては古いタンクの耐震基準の見直しや耐震診断、耐震性の向上などが挙げられている。

竹内論文「川崎コンビナート地域（臨海部）の安全性向上に向けて」は、複合的な構成となるコンビナート地域を取り上げ、問題点を多数指摘し、詳細かつ具体的な対応策を提案している。この地域にはナフサ、原油、LNGなどの可燃性物質、化学物質製造原料、毒ガス、毒性物質があり、地震や津波により、火災の発生や毒性物質の流失の危険が大きい。LNGタンクには何らの法的規制もないが、引火性可燃物であり、常時、マイナス160度の確保が求められる。電源遮断時もこれを維持できるか疑問である。LNGタンクの耐震強度も低い。

上記3論文には、地震・津波に対して臨海部コンビナートが抱える多くの問題点が指摘されている。また、対応策や解決策も提案されている。しかし、行政も企業も法的再検討や具体的な改善計画を立てているようには見えない。また、政府、地方行政、大小の民間企業、地元住民の間に新たな連携は構築されていないようである。

第 33 回原子力発電問題全国シンポジウムの報告

富田道男

標記のシンポジウムが8月25日(土)午後2時から26日正午までの2日間にわたり、福井県敦賀市のホテル「ニューサンピア敦賀」大ホールで開催され、参加者は、県内115名、県外86名合計201名で、会場に立ち席ができる盛況であった。また、マスコミの取材もあり、福井新聞と福井中日新聞が26日の朝刊に写真入りで、日本科学者会議の名前と共に大きく報道していた。このことから敦賀市でのシンポジウム開催は、時と場所の設定においても成功であったと言えるであろう。

このシンポジウムの現地実行委員会は、事務局を地元福井支部が担当されて、これに石川、京都および大阪の各支部が加わり構成された。京都支部から富田幹事が参加したが、滋賀支部は、8月1日の原水爆禁止世界大会・科学者集会の開催地を引き受けた関係で参加されなかった。現地実行委員会は、5月7日(月)の第1回から8月21日の第7回まで開かれたが、第1回の素案に対する全国実行委員会の了解を得て、第4回以降は、それまでに決めた大枠に沿って事務局の福井支部が実行案を作成された。

予稿集の付録によると、日本科学者会議・原子力発電問題全国シンポジウムは、1972年8月に第1回を北海道で開催してから、ほぼ毎年全国各地で開催されてきた。「安全神話」の嘘を実証した福島第一原発事故後

の2011年8月に、岩手県盛岡市において第32回目のシンポジウムが「福島原発災害と再処理工場の実態 — 原子力発電を問い直す—」のテーマで開催されたが、原子力発電問題全国シンポジウムとしては初めて「原子力問題を問い直す」という副題が付いた。そして今回の第33回は、5月の全原発停止後最初に再稼働された大飯原発のある福井県の敦賀市において、「福島原発災害の教訓をどういするか」のテーマで開催された。

シンポジウムの第Ⅰ部では、教訓とすべき福島の現状を知るために「福島事故は現在どうなっているのか、なぜ起きたのか」をサブテーマにして、25日の午後、次の4件の報告が行われた。基調報告として山本富士夫氏の「安全神話と原子カムラの形成と崩壊まで」、館野淳氏の「シビアアクシデントとしての福島事故」、伊東宏之氏の「福島の現状と再稼働問題」及び野口邦和氏の「福島の汚染状況」であった。

第Ⅱ部は、初日の午後5時から始まり、第Ⅰ部の報告をもとに「福島原発事故をふまえて、今後の進むべき道をさぐる」のサブテーマで次の5件の報告が行われた。最初の児玉一八氏の「原子力防災計画と防災訓練」の報告は、初日の最後に行われた。北陸電力の志賀原発を持つ石川県の「原子力防災計画」における非現実的な事故想定が福島の事故を経て少しは改善されたが、

今年の6月9日に行われた原子力防災訓練では地震による事故の想定を原発にのみ限り、避難先の被害を考慮しないことなど、非現実的な訓練の実態が報告された。石川県の某市長の「実際に過酷事故が起きたら避難ができない」との言葉を紹介し、原発事故では避難のできない実態を明らかにするために各原発設置自治体に防災訓練を実施させることが重要である、との指摘に会場から拍手が沸き起こった。他の4件の講演は、26日の午前9時から始められ、坪田嘉奈弥氏の「原子力発電所と雇用問題」、本島勲氏の「原発の停止・廃止に伴う電力需給と電力システム」、和田武氏の「電力買取制度下での再生可能エネルギー普及と地域の発展」及び清水修二氏の「原発に依存しない地域づくり」の順に行われた。

各報告は30分講演の質疑5分で進められ、第Ⅰ部の4件全体の討論時間及び第Ⅱ部の

総合討論時間もわずか15分という窮屈なスケジュールで実施することになってしまった。印象としては、議論による深まりのない報告者の“言いつ放し”の感を免れないものであった。

冒頭に述べたように、シンポジウムとしては成功のうちに入るとは思うが、現地実行委員として企画に加わりながら、また2日目の司会を大阪支部と共同で担当して、“言いつ放し”講演になったことに対する忸怩たる思いが残った。

科学者会議が原子力発電問題への取り組みを強化するには、エネルギー・原子力問題研究委員会主催ではなく、別の運動形態を追求・強化しなければならないとの思いを強くしている。

「無償教育の漸進的導入」に関する

日韓（韓日）連帯シンポジウム（8/31）の報告

龍谷大学分会・細川孝

8月31日午後、大学評価学会と龍谷大学社会科学研究所（大学評価・大学経営研究センター）は『「無償教育の漸進的導入」に関する日韓（韓日）連帯シンポジウム』を開催しました。当日は韓国から研究者と市民運動家を招いて、韓国の授業料問題の取り組みについて報告していただくとともに、日本側からも大学（教授会連合）、高校（教職員組合）、学生（学生自治会）の取り組みが紹介され、高学費問題を解決していく展

望が議論されました。参加者は約50人でした。

今回のシンポジウムは、今年2月に行った韓国調査を踏まえ、日韓（韓日）の共同をいっそう促進しようとして開催されたものです。なお、大学評価学会のメンバーは2008年5月にも韓国調査を行い、2009年8月には韓国から研究者を招聘し、シンポジウムを開催しています（韓国調査については、細川孝編著『日本の大学評価—歴史・

現状・評価文化―』晃洋書房、2012年、所収の中道眞論文を参照ください。また、2009年のシンポジウムでのキムサンボン教授（韓国・全南大学）の講演は、大学評価学会年報第6号『現代社会と大学評価』に収録されています）。

さて、今回のシンポジウムではまず、韓国の代表的な市民運動団体である参与連帯のコーディネーター長アン・ジンゴルさんが報告されました。そこでは、大学登録金（授業料を含む納付金）の半額化に向けた国民的な運動が紹介されました。韓国における高学費の深刻な実態や著名な俳優が運動に賛同していること、イミョンバク政権の（登録金半額化に対する）公約違反などにも言及されました。そのうえで、登録金半額化が、国民負担の軽減、学生たちの学習時間の確保、内需振興という一石三鳥であることが強調されました。

続いて、パク・コヨン祥明大学教授・韓国大学教育研究所所長は、「韓国高等教育の公共性の水準と登録金負担軽減策」のテーマで報告され、教育が持つ公共性、韓国における登録金の現状、登録金削減の方向性、の3点について解明されました。登録金削減の方向性については、パクオンスン市長

のもとで半額化を実現したソウル市立大学の状況が紹介され、登録金後払い制度の問題点と改善策が述べられるなどしました。

韓国側2人の報告、日本側3人の発言を受けたシンポジウムでは、韓国の状況についてより詳しい情報を求める質問が相次ぎました。また、アンジンゴルさんからは是非今後も交流を続けていきたい、来年2月に韓国に招待したいとの発言がありました。時間の都合もあって、十分な理解が深まったとは言えない部分が残っていますが、今回のシンポジウムを通じて、両国の抱える課題に共通する部分が大きいことが明らかになりました。

今回のシンポジウムにおける二つの報告は、『現代社会と大学評価』第8号（2013年刊行予定）に収録される予定です。また、今回のシンポジウムの記録を含め、大学評価学会における「高等教育における無償教育の漸進的導入」に向けた取り組みについては、シリーズ「大学評価を考える」の1冊として現在編集作業を進めているところです。

第9回『日本の科学者』近畿地区サポーター会議の報告

宗川吉汪

日時：2012年9月2日（日）

13時30分～16時30分

場所：京都支部会議室

出席：尼川（兵庫）、小森田（大阪）、
島影（大阪）、宗川（京都）、

長野（大阪）、野口（滋賀）

出席者の近況報告

尼川：兵庫支部市民フォーラム「大阪湾の津波を考える」（7/25）；低線量被曝問題の取り上げ方について兵庫支部幹事会で

意見交換.

長野：まちづくりサイエンスカフェ「自然エネルギーが拓く宇陀の未来」(7/14)；動物園前サイエンスカフェ「子どもも大人も楽しめる科学マジック」(8/26)；阪大教職員の給与カットなど.

小森田，宗川，野口：原水禁大会科学者集会（大津）(8/1)；全国原発問題シンポジウム（敦賀）(8/25～26).

野口：肥田舜太郎氏講演会（10月8日大津）の紹介.

小森田：技術の中立性についての討論.

島影：障害児医療，子どもの虐待問題，電磁波の問題など.

前回議事録の確認と JJS 編集委員会の報告

JJS 編集委員会へ投稿，掲載記事の推薦，

提案等

・島影美鈴さんの本『研究難民』の書評：前田さん.

・末永恵子著『死体は見世物か』の書評：宗川が書いて編集部に送った.

・サイエンスカフェ運動について長野さんが執筆.

・「人体の不思議展」については来年4号の「いのち」特集（予定）に向け宗川が執筆.

JJS 論文の講評

8, 9月号について感想・意見を出しあった. とくに9月号をめぐって新しい大衆運動のあり方について意見がでた.

次回の会議予定

10月28日（日）13：30～16：30

@京都支部会議室

関西技術者研究者懇談会 9 月例会の報告

山本謙治

日時：2012年9月9日（日）14時～17時

場所：JSAO 事務所

参加者：5名

茨木における55年前の原子炉設置反対運動から学ぶもの

山本謙治氏

55年前，茨木市で，文字通り市民一丸となった反対運動で，関西研究用原子炉設置計画を白紙撤回したと言う歴史があった.

3. 11をきっかけに，市長や町内会，青年会などの反対決議文や当時の新聞，全国25大学140名の科学者による計画撤回の要望書と署名，京都大学自治会の見解と

声明，推進派学者と反対派を代表する武谷三男教授（当時）との公開討論会の速記録など，当時の運動の資料が発掘された. これらの資料と大阪府立大樫本教授の論文に基づき，運動の経緯を，時間軸を縦糸に社会背景を横糸にして見ることで，今学ぶことが見えてくる.

①，計画発表の翌日には地元で反対同盟が結成され，4日目には反対集会が開催されている. 当時の原水爆禁止運動の高揚が素早い反対運動の立ち上がりには反映している.

②，一ヶ月で有権者の97%が反対署名を行い，公開討論会が実施されている. 全国140名の科学者の署名と要望が発表され，「原子炉は本質的に危険」と言う情報ビラ

が全戸に配布される。

③、市が議員団を科学者の下に派遣し、住民の「水を守れ、命を守れ」と言う根拠的要求に、科学者が正当性と確信を与え、科学者も住民との連携の中で、三原則の重要性を実践の場で深め、高めていった。

④、事態がこう着し、調整が学術会議にゆだねられ、運動とはなれた場面で議論が行われるにつれて、「平和利用」という大きな流れの力により、「本質的な危険」を扱う科学者の倫理と、そこから求められる三原則の重要性についての議論が次第に薄められ、学術会議としての原子力の危険性や安全についての見解が不明瞭になって行った。

⑤、それでも、自治体が認めない限り、原子力の設備を設置することは出来ないと言う原則は残った。これまで25カ所が原発設置を拒否している。

討論

★ 最初にあった宇治への設置計画は、淀川が汚染されると大阪が汚染されるので撤回され、茨木の安威川は神崎川へ流れるので、茨木だけなら何とかかなと言う説明がなされた。都市圏に原発を置かず過疎地に配置すると言う考えの元がその当時からあった。

★ 10月26日の原子力の日に、茨木では55年前の原子炉設置反対運動の資料展と「原発を考える集い」を実施する。現在、公民館や寺院、保育所などで巡回の資料展をと小集会を行っている。大阪の原発ゼロの会と科学者会議大阪支部が賛同団体となっている。

★ 科学者会議の43回定期大会決議には、改めて現時点で明確になった「本質的な危険」が定義され、直ちに原発廃止を決定する国民的共同を進めることが提起されている。

★ 10.26の茨木の市民の集いに展示するポスターづくりに知恵を出し合う。

8月の例会はなかったが、有志による合宿を行い、新しい活動方向についての意見交換を行い、バーベキューで親睦を図り、翌日は周辺地域の自然エネルギー調査や農業による地域活性化の調査を行った（参加者6名）。また、8月中旬には有志4名で小水力発電についての情報交換と進め方の議論をおこなった。

これからの日程

10月7日（日）

自然エネルギーへの転換について
中村郁夫氏

研究委員会・読書会・シンポジウムの案内（「JSA 近畿」も参照）

『日本の科学者』読書会 9 月例会

9 月 21 日（金）15:30～17:30

場所：JSA 京都支部事務所

『日本の科学者』9 月号特集「新しい社会運動の胎動」

原論文：反原発運動のエートス（報告者：山口進次）

島野・本田論文：オキュパイ・ウォールストリートの実像（報告者：未定）

木原論文：2012 年京都市長選挙とダンス規制反対運動（報告者：清水民子）

梶原論文：3.11 以降の原水爆禁止運動（報告者：宗川吉汪）

個人懇フィールドワーク

日 時：9 月 25 日（火） 午前 9 時半 京阪三室戸駅前集合（弁当持参のこと）

テーマ：宇治の都市型水害被災地の現地見学会

内 容：記録的豪雨と集水源山地の開発（ゴルフ場など）による下流の新興住宅地での
甚大水害被災地を歩いて見学

案内者：紺谷吉弘氏（個人懇，国土研）

個人懇秋の勉強会

日 時：10 月 25 日（木） 午後 1～5 時（予定）

場 所：東山いきいき市民活動センター

テーマ：橋下・「維新」の会を考える

1. 鯉坂 眞氏：橋下・「維新」の会の本質をどう見るか
2. 望田幸男氏：「ハシズム」とナチズムの間に立って－3つの視点から－
（討論の時間を十分にとって議論をしたいと思います。）

会員からの通信：「第三回小中一貫校問題を考える全国交流集会（案）のお知らせ

藤本文朗さんから「第三回小中一貫校問題を考える全国交流集会（案）——東山の

学校統廃合を考える会」についての案内がありました。

経過とつどいの狙い（目的）

呉市・品川区・京都市など、小中一貫校が進められてきました。行政は「中一プロブレム解消」「教育再生の目玉」とも言っています。

京都市でも住民の要望という形で進められています。本当に、子どもの成長発達にとって、小中一貫校方式がいいのか、全国各地の運動を交流する目的で、2010年、第一回の全国交流集会を京都市東山（120名参加）で、第二回を東京品川区（200名参加）で開きました。そして「これでいいのか小中一貫校」（新日本出版 2011）がこれから交流の成果を反映して出版されました。

「第三回を開いてほしい」との声が、新潟・東京・大阪・沖縄あたりから出ています。東山区で再度この集会を開こうという提案です。

日時：2012年12月9日 9:00～16:00

場所：華頂大学（東山区林下3-456）

主催：実行委員会（委員長：藤井伸生）

※第一回実行委員会が9月18日（火）18:00～ 京都教職員組合で開催されます。

連絡は、藤本文朗さん（Tel & Fax 075-541-5270）まで。

寄稿：原発事故と科学者の社会的責任について

宗川吉汪

科学者の社会的責任を考えると、ブレヒトの有名な戯曲『ガリレイの生涯』の第14場の一節が念頭から離れない。

「私は科学の唯一の目的は、人間の生活条件の辛さを軽くすることにあると思うんだ。もし科学者が我欲の強い権力者に脅迫されて臆病になり、知識のために知識を積む重ねることだけで満足するようになったら、科学は片輪にされ、君たちの作る新しい機械もただ新たな苦しみを生み出すことにしかないかもしれない」数年間は私はお上と同じ力を持っていたのだ。なのに私は、自分の知識を権力者に引き渡して、彼らがそれを全く自分の都合で使ったり使わなかったり、悪用したりできるようにしてしま

った」「私は自分の職業を裏切ったのだ。私のしたような事をしでかす人間は、科学者の席を汚すことはできないのだ」（岩淵達治訳、岩波文庫、1979, pp. 190～193）

上の台詞は1938年の初稿にはない。広島・長崎への原爆投下の報に接して戦後に書き直されたものである。この度の福島原発事故と重ねて改めて読み直すと、ずしりとした言葉の重さを感じる。ブレヒトは科学の価値を明確に「人間の生活条件の辛さを軽くすることにある」としている。そして権力にこびへつらう科学者は裏切り者だ、と厳しく断罪する。

私は、日本科学者会議の会員であるが、会員の多くが所属する、あるいはかつて所

属した大学・研究所も総体としては日本の権力機構の一部である。明治政府は富国強兵のために帝国大学を設立した。戦前の天皇制のもとで権力は、戦争遂行のため、財界の儲けのために大学を使ってきた。戦後もその基本構造は温存されたままで、大学は財界・大資本に奉仕させられてきた。そして今日、国立大学は法人化されたが、それは彼らにとってさらに使い勝手の良い大学にするためであった。

しかし一方で、真理を追求する科学・学問は支配の構造をも暴露せずにはいなかった。理念としての学問の自由、大学の自治も獲得された。戦後の世界の科学者運動は、科学者の戦争への協力の反省の上にたって出発した。日本科学者会議も戦争を拒否し、民衆の側に立つ科学者の集団でなければならない、と考えている。

原発は、「核の平和利用」の欺瞞の下で、核兵器開発の陰謀を秘めながら、ひたすら支配勢力の儲けのために導入され、建設され、運転されてきた。原発のために、物理系・生命系・社会科学系を問わず多くの科学者・技術者・研究者が動員された。福島原発事故は、原発が軍事技術と同根の人類とは共存し得ない危険な技術であることを白日の下にさらした。

科学者の社会的責任を言う場合、「責任」とは何かを問わなければならない。「責任」の字句には「責め」と「任務」の二面の意味がある。福島原発事故に則して言えば、科学者は事故に対してその「責め」を負わなければならないのではないか。原発の危

険性を見抜き、事故を未然に防げなかった責任が科学者にあるのではないか。わが日本科学者会議は、一貫して原発に対して批判的立場をとってきたが、原発そのものを否定することはしなかった。私個人が原発に対して否定的であったにしても、原発の廃絶を会の運動にできなかった事に責任を感じる。「責め」を負うことを棚上げにした「任務」(脱原発運動)は本当の意味で責任を取ることにならないのではないか。

今回の原発事故による原子力災害は、はからずも科学者運動の原点を想起させることになった。当面の日本科学者会議の最重要課題は、原発の本質を明らかにし、原発の危険性を訴え、原発の廃棄を求めることにあるだろう。

電気と食糧の供給はわれわれの生存の要である。これらは地産地消で住民の手で行わなければならない。その条件は日本列島にある。地球温暖化を食い止め、平和的にエネルギーを生産するために、石油・石炭・ウランのような輸入地下資源に頼らないで、太陽光、風力などの自然再生エネルギーの利用が求められている。アメリカ主導の原発や、大手商社の輸入する石油・石炭に頼らない発電は革命的な事業になるだろう。

日本近現代史の中で、福島原発事故は、黒船来航、敗戦に匹敵する大事件である。黒船来航は薩長主導の明治維新につながり、敗戦はアメリカ主導の戦後民主化につながった。福島原発事故を日本で初めての国民99%主導の「草の根革命」につなげるという壮大な展望をもって原発ゼロ運動を推進していきたい、と思う。

オピニオン（または愚痴）：

「京都の科学者」の編集を1人で3年間担当して

「京都の科学者」編集担当幹事・鈴木博之

支部機関誌「京都の科学者」編集委員を前任者の山谷さんからバトンタッチして3年半が経過した。この間に「京都の科学者」164（70p）,165（55p）,166（33p）,167（30p）の4号を発行することができた。この間の編集状況を報告し、今後の「京都の科学者」の改善策を考える上での参考にしていきたい。

<2010 年度>

2010年4月発行の164号は、2009年度個人会員懇談会の例会・勉強会の講演内容に限定されており、編集委員も個人懇会員として依頼されたものであった。年度末に1年間の全ての個人懇例会の講演内容をまとめて発行することになっており、年度前半の例会講演は例会のほぼ1年～半年後に発行されることとなり、例会での原稿依頼の際に発行は1年後～半年後ですがと言って依頼するのが編集者にとっては非常に苦痛であった。実際に原稿の集まりも悪くて編集に苦勞した。

また、印刷発行は従来、支部事務所で個人懇の年寄りばかりが集まり、自力で印刷し、製本屋に製本を依頼することとしていた。しかしながら、編集した電子ファイルをインターネットで送れば、安価に短期間で印刷製本してくれる印刷屋が見つかり、年寄りの苦勞は不必要となった。一方で原稿集めと編集を編集者1人で担当すること

となり、編集者の個人的責任は増大することとなった。

<2011 年度>

165と166号の発行にあたっては、この時間差発行を克服するために、年2回発行することとし、個人懇例会だけではページ数が不足するので、職域分会や支部の例会活動も掲載することとした。発行の責任も個人懇から支部幹事会に移行することとなった。時間差発行の問題は一応克服されたが、掲載対象の例会が増大し、したがって原稿依頼対象者が増大し、編集者はあいかわらず原稿依頼と原稿集めに苦勞することになりはなかった。苦勞の結果、165号は55ページのまずまずの出来映えで、予定より1ヶ月遅れではあるが発行できた。166号は後半期の活動を反映して33ページの小冊子となったが、予定通り6月には発行できた。

<2012 年度>

2011年度の経験で「京都の科学者」の編集を軌道に乗せたと思っていたのに、2012年度は東日本大震災の影響が「京都の科学者」にも及び、編集者はまたもや原稿集めに苦勞することとなった。その理由は簡単である。京都支部には全国的なレベルの論客が多いので、そのような講師の例会報告内容が『日本の科学者』に先取りして掲載されてしまい、後追い型掲載の「京都の科

学者」への掲載が不可能となったことである。その結果、先祖返りして、2010年度と同様に年1回の発行とせざるを得なかった。講演者への原稿依頼の反応も悪くて、例会当日の講演要旨をそのまま掲載して何とか印刷可能なページ数を維持することができた。発行日も7月になっていた。

＜「京都の科学者」に＞

存在意義はあるのか？＞

この3年半を編集して率直に感じるのは「京都の科学者」にはたして存在意義があるのかという疑問である。この3年半の間に「京都の科学者」に対する意見・感想を何らかの形で聞いたことは一度もない。「支部ニュース」に関しては時々熱心な会員から苦情や意見があることを承知しているが、「京都の科学者」に関しては知らない。会員にとってどうでもよい機関誌なのか？編集者の努力に遠慮して意見がないのか？編集の内情も知らないのに編集者の努力が理解できるはずもないと編集者は思う。つまり、どうでもよい機関誌なのであろう。そんな機関誌なら廃刊すべきではないか？

存在意義がもしあるとすれば、それは「京都の科学者」が京都支部の活動を対外的に紹介する適当なパンフレットとしての機能を有することである。実際に3.11以後の普及活動の中で「京都の科学者」の在庫は一挙になくなった。京都支部の活動紹介機能は果たしているようである。それなら京都

支部の活動紹介機能としてだけのために「京都の科学者」発行を継続すべきであろうか？

＜「京都の科学者」を

いかに継続すべきか？＞

「京都の科学者」の最大の欠陥は、講演時期と印刷発行時期との時間差であらう。年2回発行にしても最大半年の時間差が発生する。哲学的考察ならいざ知らず、時評的講演に対してはこの時間差は致命的である。これを解決しようと思えば、「京都の科学者」を1回の大規模なシンポジウムの講演内容の報告に限定して、単発的な例会の講演内容は支部ニュースにその都度に掲載することであらう。

また、以前は「京都の科学者」には個人懇例会報告とともに支部大会議案書が掲載されていた。現在、支部大会議案書は単独で独立した文書として大会前に配布されているが、大会決定後の報告は会計報告のみが支部ニュースに掲載されている。これを修正して大会後に大会決定結果を「京都の科学者」として発行することが考えられる。支部活動の紹介機能としては、この支部大会決定報告としての「京都の科学者」で充分果たせるのではないかと考えるがいかがであらうか？

※※※※※※※支部幹事会だより※※※※※※※

第3回事務局会議（8月13日）、第4回幹事会（8月24日）、第4回事務局会議（9月7日）の報告です。

1. 支部現況

会員数 276（一般会員 249、院生・学生会員 27） 読者 6

2. 会費納入状況

2012年度会費納入率は8月31日時点で53.0%.

引き続き会員みなさまのご協力をお願いします。

3. 支部分会の設置について

設置が承認された分会

- ・京大医学分会：分会員5名（代表者：菅原）
- ・工繊大分会：分会員6名（代表者：前田）
- ・学生研究会：分会員3名（代表者：上野恭平）

近々設置予定の分会

- ・個人懇談会：分会員7名+α（代表者：鈴木）

9月3日、個人懇談の立ち上げについて相談した。夏の例会、秋の勉強会、フィールドワーク、新年例会などこれまでの行事を踏襲することにした。例会は原則的に週日に開催することとし、主に退職者会員に参加を呼びかける。

- ・関西技術者研究者懇談会：9月17日に立ち上げ相談会を開く予定

4. 会員5000人回復運動について

入会対象者をできるだけ挙げることにしています。みなさまのご協力をお願いいたします。

5. 秋からの活動について

- ・個人懇談のフィールドワーク：9月25日、秋の勉強会：10月25日
- ・科学・技術フォーラム（工繊大分会）11月24日
- ・科学・技術フォーラム（新入会員の講演会）12月に開催予定

（文責：宗川吉汪）

JSA 第 19 回総合学術研究集会（岡山） — 持続可能な社会への変革をともに —

会場：岡山大学一般教育棟（岡山市北区津島中 2-1-1）

日時：2012 年 9 月 14 日（土）～16 日（日）

詳細は 19 総学ホームページ：http://sky.geocities.jp/jsa_okayama/sougaku19th.htm
をご覧ください。

